論文

自他認知と鏡像左右反転

——Ein metaphysisches Spiegelspiel

池田光義

形而上学的鏡遊びとは、「平面鏡に映る鏡像は上下では反転していないにもかかわらず、なぜ左右で反転しているのだろうか」という問いをつらつら慮り、その合理的な回答を捻り出す観念遊戯の謂である。本稿は、鏡像を原則として自己の鏡像に限定したうえで、その左右反転について世界認知、とりわけ他者認知の文脈で考察してみたい。[1]

1

冒頭から前言を翻すようだが、手始めに鏡文字と戯れてみる。本稿の基本的スタンスの一端を予め示し、鏡遊びの準備運動をするためである。まず注目したいのは、鏡文字が左右反転して見える場合（個人）だけでなく、裏返しに見える場合（個人）も少なくないということである。もっとも、原像の文字が左右対称の場合には、鏡像の左右反転も裏返しも問題にならないのは自明である。文字の形状や個人にもよるが、（原像の文字が隠されて）鏡文字だけを提示されるときに、裏返しと感じる場合（個人）が多いようだ。その場合でも、原像の文字が傍らに示されると、裏返し文字から左右反転文字に化けやすい。では、左右非対称な文字の鏡像はなぜ裏返ったり、左右反転して見えるのか。その回答に迫るには、「何を基準にして、あるいは何に対して裏返っているように見えるのか」という問題を考えることが捷径である。もう少し言えば、鏡像を認知するさいに意識下で進行している比較・判断行為とその参照基準を問うことにある。

そもそも、「鏡文字が裏返って（左右反転して）いる」ということは、「鏡文字が裏返って（左右反転して）見える」ということであり、後者は、「私たちが鏡文字を裏返っていると（左右反転していると）見なしている、判断している」ということである。ただし、この判断は、通常、自動的、機械的、無自覚的に行われる判断である。では、私たちは何を基準にして鏡文字が「裏返しだ」、あるいは「左右反転している」と判断しているのだろうか。もちろん、原物あるいは同形の文字である。したがって、ある鏡文字を見るときに、比較の基準になる原基的文字が現前にはなく、しかもそれが未知である場合、あるいは記憶から消えている場合、私たちは裏返し感も左右反転感も抱かないであろう。[2]

では、なぜ少なからぬ鏡文字が裏返しと見なされるのか。私たちが日常生活レベルで（薄い紙や旗や窓ガラスなどに透けて見える）裏返し文字に頻繁に接していることが、この裏返し感覚の成立を助長しているのかもしれない。あるいは鏡文字に日常的に接するようになる以前の時代から、裏返し文字に親しんできたことが一因かも知れない。肝要なことはしかし、文字の構造上、平面で絶えずこちらの側（私たちの方向）を向いているように、あるいは私たちが無自覚的にそう感じ、そう接するように按配されている点でないだろうか。鏡像において、このようにこちら向き感覚を触発するように仕組まれた原像文字の原型構造が崩れてしまう場合、こちら向き感覚も消滅し、その反動であちら向き感覚、つまり裏返し感が生じるのではないかということである。横を向くことも上を向くこともできない二次元空間の住民である文字は、こちらを向いていなければ、裏返るしかないだろう。一方、比較的単純な左右非対称性を示す文字の場合、それを現前の原像文字と直接比較したり、非現前でもその形状を明晰に想起したりできるのであれば、私たちは、その鏡文字に左右反転という一定の構造を見て取るのである。比較基準の原像文字の構造と鏡文字の構造との間に左右線対称・対蹠の関係を感知するからであろう。そして、これが鏡像の左右反転感覚の成立にとって必須の要件なのである。

文字が単独にではなく、文字列、それもとりわけ一定の内容を意味する文字列として鏡に映された場合も、左右反転を感じることが多い。例えば原像の文字列が左から右の方向に並んでいるのであれば、その鏡像は右から左の方向に並んでいるように見えるのだ。この場合の条件も、比較基準となる現像とその鏡像との間にある種の左右対称が意識されることであろう。この左右対称意識は、文字列が暗黙裡に指示している〈読み書きの流れの方向〉を明晰に意識することで強まるようだ。いずれにせよ、鏡文字が裏返ったり、左右反転して見える現象には、様々な文脈・次元で無意識的に進行する複数の見なしや判断が関与し、相互作用していると予想される。この視点は、鏡像の左右反転問題一般を考える上でも重要であろう。

2

さて、自己像の鏡映左右反転問題とは、「平面鏡に映る自己の鏡像はなぜ上下では反転していないにもかかわらず、左右で反転しているのか（反転して見えるのか）」というものであった。では、「鏡の中の私が、上下は反転していないのに左右は反転している」と見えるとき、心のはたらきとして、何が起きているのだろうか。この問いに答えるヒントは、左右反転を体験する瞬間に感じられるある種の困惑や違和感にあるのではないだろうか。それをあえて言葉で表現すれば、「あれっ、何か違う」という感覚だろう。では、私に向かい合う鏡の中の私は、何とどこが違うのか。通常の生活場面で向かい合う他者が示す基本構図と左右関係が違うのである。この現象を説明するために、次のような想定に立ってみよう。それは、「私たちには、他者との対面状況を認識する（とくにその空間的構図を観念的に構成し理解する）主観的条件として対面認知の基本図式が備わっている」というものである。

この認知図式は、対面相手の認知像から独立して成り立つ抽象的な枠組みシステムや参照基準ではなく、観念的に再構成される対面相手の身体・顔が示す構図・挙動としてあくまでも個別的・具体的なかたちで実現される認知のはたらき、機能そのもの、あるいは、この機能が従う形式、規則性である。したがって、私たちはこの認知図式をそれ自体としては直接的に意識することはできず、それが絶えず結実する結果、絶えず再現する認知像の構造性として間接的、事後的に感じ取ることができるに過ぎないのである。それは、私たちの意識の背後で、自動的かつ暗黙知的に作動しているのだ。また、対面相手の認知像が自分自身との位置・方向関係などを間接的に示しているということも重要な契機であろう。つまり、対面認知図式は、もっぱら対面相手を認知するための図式のように見えるが、実は対峙し合う他者と自己の両方あるいは両者の相互的な対峙関係そのものをその内部に組み込んでいるのである。

本稿で強調したいのは、この対面図式が、相互に連動する二つの座標系から成り立っているということである。〈私〉がその原点・起点を占める自己座標系と対面者を直接的に認知・解釈する働きのある対面座標系とである。対面座標は、〈私〉に対して様々な角度・距離・運動を示す動的でしなやかな対物・対人座標の一パターンと考えられるし、自己座標も、こちらを向いて電車から降りてくる通勤客の一団とこちらに背を向けて乗車しようとしている（私もその中にいる）一団との交錯場面を思い浮かべてみれば明らかなように、状況に応じて〈私〉の身体座標から〈私たち〉の集団座標に拡張すると思われるが、ここではそうした問題には立入らず、比較的固定した一対一の対面場面に限定して論を進める。

ちなみに、意識は、対象意識か自己意識かを問わず、程度の差こそあれ、常に上下・前後・左右感覚を伴っている（ジョンソン、1991など参照）。たんに空間概念一般が世界知覚のアプリオリな条件なのではない。その空間概念には上下・前後・左右という座標系がすでに組み込まれている。すなわちそれは、視空間を見る〈私〉、聴空間を聴く〈私〉と向かい合う空間として構成されているのだ。向きのない空間を私たちは知覚構成できないのである。もちろん、座標系は、知覚される個物や現象とは独立して外的に与えられるような枠組みではない。それらの各々の見え方、大小・前後・上下関係、あるいはその変化として実現している、それ自体としては不可視な構造である。この上下・前後の座標系の中で対象は（再）構成され、それにより自己も（反省的意識形式には、対象を構成する自己＝主体として現れる形で）（再）構成される。対象の「現れ方」の中に、上下・前後感覚が、一対一対応ではないにしても、一定の連動性・相関性の形で間接的に表示されているのだ。そもそも意識一般が、具体的・個別的な知覚・表象形式だけでなく抽象的・普遍的な思考形式においても、前後・上下・左右に構造化されている。反省的な自己意識にも、（自己の身体意識に対応し規定された）前後・上下・左右の布置があり、それは混濁・朦朧状態から明晰な覚醒状態に移行するにつれて顕在化する。私たちは、反省意識において常に前方を向いており、逆立ちすることはできず（少なくてもきわめて困難であり）、左右を恣意的に反転させることはできない。上下・前後・左右の感覚契機を欠落させた意識はあり得ないのである。[3]

対面座標系でも自己座標系でも、上下・前後・左右の方向関係が空間構成の重要契機である。①上下に関して言えば、両座標系とも（地面に対し）等しく正立である。その背景には、人間が生活空間を熱帯樹冠帯の立体空間からサバンナの平面空間に移すことで（その優れた色覚や立体視能は保持しながら）倒立視能を失い、正立視に特化したという認知進化上の事情が潜んでいると推定されている。大半が正立形象で占められる大地を這いまわることが通常の行動パターンとなった人類だが、その人類に備わる認知座標では，地面に対して倒立した複雑な形象はそのままでは解読不能なヒエログリフであり、わざわざ反転させなければ理解できないのである。[4] ②前後関係に関して言えば、両座標系は逆方向になり、相互に〈向き合う〉形になる。この点にもやはり認知進化論上の背景があるのかもしれない。ニホンザルなどの母子関係が密着型なのに対して、チンパンジーあたりから親子関係が――顔を見合わせる、抱きしめる（抱きしめられる）、微笑み合うといった相互行為を伴う――「適度の距離をもった相互対面」型になるという［松沢、2002］。もちろん、〈向き合う〉のは対人関係に限ったことではなく対物関係でも見られるが、相互対面型の人間関係の発達は、対面座標系における前後逆向きの構造を顕著なものにする一因になっていると考えてよいだろう。そして、相互に

〈向き合う〉構図を作りあげているもう一つの契機こそが左右逆転なのである。③すなわち、対面座標では対面相手は自分の座標系とは左右逆の関係で認知されるのである。しかも、直接的・瞬間的に！　対面相手が自分とは左右逆に見えるということに、自他関係・自他意識の基本構図が示す相互性が端的に示されていると言える。

3

さて、鏡像の左右反転の謎に話を戻してみると、鏡に映し出される自己像が、通常の対人・対面状況で自動的・暗黙知的に作動する対面図式に対して、上下・前後関係では一致しながら、左右に関して（のみ）逆転してしまう事態にこそ、鏡像の左右反転の秘密が隠されているとされている。私たちの予測脳［藤井直、2005］は、対面者が、自己座標とは左右反転する対面座標に整合した形姿で現われることを暗黙知的に予測している。認知活動の大半を占める暗黙知的予測は、予測どおりに事態が進む限り、識閾を越えることはほとんどない。ところが、鏡の世界では、自己座標と左右一致し対面座標とは左右逆の〈〈私〉の姿をした〉対面者が映しだされているのである。暗黙裡の予測は外れ、この外れたという〈異常〉事態が「ちょっとした違和感」という主観的な感覚の形をとって意識に現れる。それとほぼ同時に、あるいはそれにすぐ続いて「鏡の中では〈私〉が左右逆に映っている」という認識＝判断が意識的レベルで行われるが、その背後では、対面図式を基準にした鏡像の比較判断が暗黙知的に進行しているのである。鏡像の左右反転の判断が、認知一般がそうであるように、意識―無意識の重層的過程において実現されるというのが、本稿の基本的スタンスの一つである。それともう一つ、重要なテーゼを（再）確認しておきたい。それは、左右反転の判断が生じる決定的条件が、第1節で示唆したように、潜在的・予測的に働く対面座標と鏡映の自己像との間に左右線対称・対蹠という幾何学的構図が成り立つことにある、という点である。この左右対称関係が暗黙裡に感知されなければ、左右反転の判断、したがって左右反転現象も成立しない。左右は反転しても上下反転が生じないのは、単純に、準拠枠組みの対面座標と自己鏡像との間に上下対称が見られないからである。

したがって、この説明モデルでは、わざわざ「鏡の後ろに回って立つ自分を想定して比較してみる」［朝永、1965］という観念的な回り道は必要ないことになる。対面認知における相対する二つの座標系、対面座標系と自己座標系との密接な連動作用を想定することで、即座にかつアプリオリに作動する比較基準が私たちには備わっていると考えているからである。〈回り込み説〉などでは、自己の鏡像を見るとなぜ〈回り込む〉必然があるのかが十分に説明されていないし、さらに、その時感じられる違和感の問題が閑

却あるいは軽視されている。なぜわざわざ〈回り込む〉という観念操作をするかといえば、違和感を抱いたからであろう。この違和感そのものは、当然、違和感によって触発される観念行為によっては説明できない。もちろん、一度、「鏡像は左右反転している」という認識が明示的な普遍的・客観的知識として定着すれば、それを意識的なレベルでの〈回り込み〉操作によって確認し確信しようとすることはあり得るだろう。しかし、その後も、鏡を覗くごとに一々〈回り込み〉思考を繰り返して倦まないというのは不自然ではないだろうか。左右反転の感覚を成立させる無意識的・直接的な判断の過程と左右反転を意識的・反省的に確認・判断する過程とは次元を異にするはずである。いずれにせよ、左右反転が認知される次元、連関にもう少し注意を払う必要があるのではないだろうか。

さて、本稿は、自己鏡像を認知する瞬間に左右反転感が生じることに拘り、〈回り込み〉操作を副次的に考えるという点において、〈対人場面学習説〉や自己鏡像に説明力を限定した場合の〈対人スキマー説〉などとある程度、通底するものがある。しかし、本稿では、こうした瞬間的な違和感、左右反転感を、さらに別のいくつかの視点から考え、これらの説を補強・修正していきたい。そのひとつが、いま触れたように「自己鏡像の左右反転はある種の判断である」という視点を前面に出すことであるが、二つ目は「自己鏡像の左右反転現象はある種の錯視である」というものである。

サバンナ平原を徘徊してきた私たち人類は、すでに触れたように、平面空間に基本環境として適応し、その認知傾性・能力もこれに順応した。自己・対面座標系を組み込んだ対面認知図式は、こうした適応環境における通常の標準的な条件下で他者認知を遂行するために私たちが獲得した最も効率的な装置であり能力である。それには、個々の認知状況を逐一、意識的に判断し解釈する手間を省きながら、それでいてこの過程の結果と実際上、同様の結果をもたらす効果がある。それは何よりも、確実性・信頼性、省力性・経済性、容易さ・簡便性、即断性・即決性といった互いに両立の困難な、しかし認知機能には必然的に要求される諸要因を最善の組み合わせ、混合率で実現しているのである。

とはいえ、この道具なり能力なりが的確に機能する、つまり認知的に順機能を示すのは、あくまでも通常の標準的な環境の範囲内においてである。認知状況がこの通常範囲から外れるとき、まさにこの通常範囲で最大効率を得るためにそれに徹底的に特化した認知能力の対面認知図式は、その特化の徹底性ゆえに、逆に臨機応変で柔軟な機能性を示すことができない。鏡の中の自己像を見るという局面は、鏡像に例外的にしか接することのなかった人類にとってはまさに通常の標準的な認知環境からの逸脱である。鏡像環境には、今までの人類に備わっていた対人認知、空間認知能力では少なくても即座には処理できない現象が含まれているのである。しかし、鏡像認知という状況においても、この状況では

適合的に機能できないはずの対面座標系がやはり自動的・機械的に作動してしまう。その結果が、他ならぬ「鏡像は左右反転している」という感覚や判断なのである。〈錯視〉というものを、とりあえず、「通常のある一定の認知環境・状況では一般的に順機能的な認知が、その有効な適用範囲・程度を越えた認知環境・状況で逆機能的に働いてしまうこと」と定義できるならば、自己の鏡像の左右反転もやはり一つの錯視と言えるだろう。もっとも、それは、かなり自由度の高い緩やかな錯視だろうが。かつて倒立視能を喪失した人類は、倒立物に遭遇するたびに困惑を覚えてきたが、現代では、自らが繁茂させた人工環境の中で頻繁に相対する鏡像に対して、それに適応した鏡像視能や図式（座標系）をいまだ持ち合わせていないがために、端なくも錯視に陥り、狼狽を見せてしまうということなのだろうか……。

4

ところで、自己の鏡像について左右反転の意識をもたない者がいる［吉村、2004］ということをどう考えればよいのだろう。

街に出てみよう。ガラスに囲まれたミラー世界の中に。ショーウインドーの前で、ガラスに映る自分の全身像を横目で眺めつつ両手を大きく振り歩幅も広くとりながら歩いてみる。この時、左右反転感はない。「自分の動きがそのままガラスに映し出されている」、「ガラスの中の自分が本物の自分の動きに忠実に付いて来る」といった感じか。自分の身体の動きを意識すればするほどそう感じることができる。これは、鏡を覗き込みながら化粧に陶酔するときに感じられる、鏡の中の自分の顔や手の動きと原理的に同じであろう。その際、比較・判断の基準として作動しているのは対面座標系ではなく自己座標系であろう。それも、自分の身体の動きと強く重なり合う自己座標系であろう。鏡に映る〈私〉とその比較基準の自己座標系との間に、かの左右線対称構造は成立していない。成立しているのは連動・随伴あるいは並行関係である。前後軸の方向の反転も鏡像左右反転の場合のようには強く意識されることはなく、むしろ動作の方向が同じで同期していることの方に注意が向く。そしておそらく、この連動性意識の一部は、頻繁に鏡像を介して自己の動きや表情を確かめるという鏡像親近性と強い相関関係があるものと予想される。あるいはことによると、人類学的に恒常である対面座標系・自己座標系に加えて鏡面座標系、鏡面認知図式なるものものを装備した人類グループが形成されてきているのかもしれない……。

いずれにせよ、自己の鏡映が左右反転して見えたり見えなかったりするのは、その判断が何を基準にしているのか、どの座標系に準拠しているのか、そしてさらに、判断基準（座標系）と鏡映とが左右対称関係を形成していると（無意識的に）判断されるか否かに依存して決まる相対的な関数値と言える。氷鏡（＝床鏡、

鏡床）に映る自己像を例にとってみよう。スケートを履いて、氷上に立ち、右手を上げる。氷鏡に映る自己の姿は縦に縮んでいるが、普通の自己鏡像のように左右反転して見える。しかし、自己の足と鏡像の足との連続性に意識を向けると、鏡像の上下の対称性、すなわち上下反転に注意が強く惹かれ、左右反転の意識は背後に退く。私たちサバンナ猿においては、左右反転への注意は上下反転への関心、つまり逆さ感覚によって著しく殺がれてしまうからだろう。さて、氷上を滑り出す。実際の体の動きと氷鏡の体の動きは綺麗に並行し同期している。左右反転感も上下反転感もない。対面座標系は作動していないのだろう。

自己の鏡像ではないが、もう一例。子供が数人、鏡と並行して机に座り、こちら側を向いてノートに図形や文を熱心に書き込んでいる。私は子供の前に鏡寄りに位置取る。鏡像を覗き込み、「あれ、全員、左利き?」と奇異感を抱く。不可視の対面座標と無意識的に比較したのだろうか。現前の子供たちと比較したり、私自身が観念的に〈回りこみ〉をして、「鏡の中の像だから左右反対に映っているのだ」と納得する。次ぎに、子供たちの手の動きに注意が向く。現前の子供たちの手の動きと鏡像のそれとが鮮やかな左右対称＝反転を描く。書き込まれた文字列まで、見事に左右逆転して見える。

今度は、自動車のミラー遊びに興じてみよう。私は車の右側に前向きに座って運転している。ハンドルを右に切れば、ミラーの中のこちら向きの私も右に切る。バックミラー（およびバックカメラ）に映る後方車の運転手も右に座っている。私がハンドルを右に切れば、彼女も右に切る。実物の運転手も鏡の中の運転手も、皆同じ側に座り同じ動きを見せる。左右反転感はない。私の頭の中は、自己座標系が全面支配しているのか。対向車が向かってくる。運転手は（私から見て）左側に座り、私が左に切れば、右に切る。すれ違う。バックミラーの中で遠ざかる後姿を追う。彼女は、（私から見て）右側に座り、中央ラインに寄せて右にハンドルを切る。左右反転感はない。ついでに、そのまま、先ほどの後方車の彼女をもう一度……あれ、今度は左側に座っている。ハンドル操作も、私が右に切れば彼女は左に！　左右反転感が一気に強まる。すれ違った車の後姿を自己座標系で追視したため、逆向きに走る後方車と向かい合うことになり、先ほどは自己座標系に合わせていた後方車を今度は対面座標で捉えてしまったのだろうか。現代社会における鏡像との、あるいは鏡像を介した世界との複合的で複雑なかわりの中で、私たちはその状況と文脈で様々な認知座標系を使い分けているのだろう。でもまだ不慣れなのだろうか、座標系の使い分けや切り替がいつも円滑にいくとは限らないようだ。

最後は、こんな鏡遊び。大きなショーウィンドーに向かって人物AとBが五、六メートル離れて並び立つ。各自の正面には自己像、その二、三メートル横には相方の像が映る。各自の自己鏡像

が人物A自身には左右反転して見え、片手で髪を直す人物B自身には左右反転して見えないとしよう。その場合、人物Aの目に映る人物Bの鏡像は（自分の鏡像の左右反転に付き合わされて）左右反転するが、人物Bの目に映る人物Aの鏡像は（自分の鏡像が反転していないので）左右反転しないだろう。二人の鏡像は、視点によって左右反転したり反転しなかったりするのであり、鏡像の左右反転は、文字どおり視点に依存して相対的なのである。

5

ところで、平面鏡で自己像の左右反転感が生じるならば、凹面鏡ではそれは生じないはずである。回り込めば左右一致するので、左右反転感は生じないはずだからだ。ところが、凹面鏡のほうが左右反転感は強いというではないか［吉村、2004］。それを考慮すると、左右反転感を抱かせるのが自己の鏡像、この私の鏡像であることから出発すべきではないかという考えも成り立つ。それが自分自身であり、自分以外の何者でもないという確たる同一感を抱くことができる、つまり認知的にも心理的にも同一視できるのに、それでいて具象的〈対―象〉あるいは〈現―前〉存在としてこちらを向いている。こちらを向いている自己は、〈他者化された自己〉、つまり私の対面者へと外化され対象化された私として現れたかと思うと、次ぎの瞬間、〈自己化された他者〉、私として具象化し受肉した他者、私として私に対面する他者として現れて、反転を繰り返す。別言すれば、対面場面における自己の他者化、対象化が問題なのかもしれない。

あるいはそれは、むしろ〈自己意識〉の強度と相互スパイラルしているのかもしれない。凹面鏡の像は他者のように振る舞うが、それでもそれは私なのだと、自己像の疎遠性・他者性が意識されればされるほど自己意識が強まる。自己意識が強まれば強まるほど、他者性意識もまた昂進する。彼我の両面価値性の相互増幅に、自己の鏡像に抱く違和感の秘密があるのかもしれない。

凹面鏡は、鏡像の認知座標と私の認知座標との対称性が際立っている分だけ、両者の間における相互性あるいは対立と依存も強く意識される。平面鏡の場合、この意味での相互性はさほど強くは意識されない。凹面鏡の自己像に対して非常な違和感を抱くのは、それが私に対して、まるで他者のように私に相対し、他者のように左右対称に振る舞うからである。私に対面する私は、私が振る舞うように振る舞い、私の挙動を忠実に映し出しながら、左右関係では、まったく逆の動きをする。一瞬、鏡の中にこちらを見つめる自分のドッペルゲンガーを見た感じである。私が他者のように振る舞い、他者が私のように振る舞うというある種の不気味さ、薄気味悪さ……これは、凹面鏡のほうが強烈だ。写真の中の自己写像も凹面鏡の中の自己鏡像と同じ構図を示す。が、その左右反転感は後者の場合ほど強くはない。それが過去の自分であ

り、この今の私の動きとの生ける連動性・同時性をまったく失って完全に物化された私に過ぎないからであろう。この今の私との対立と依存、連続と不連続の契機を失った私は、たんなる私の残影に過ぎない。

車窓のガラスに背を向けて立っている女が右手を上げてほつれ髪を直している。私は鏡寄りに位置取りし、その女と鏡像を見比べる。鏡の中の女は左右反転？　後ろを向いているだけ？　（私の観念空間で）彼女に鏡の後ろに回っていただいて重ね合わせると……、重ならない。でも左右反転感はない。前後が逆転している、つまり相互に後ろ向きという感覚の方が強い。その女がくるりと向きを変えて車窓のガラスに向かい、右手で髪を直す。その女と鏡像を見比べてみるが、左右反転感はやはりない。二つの形姿を即物的に比較して対応関係を確認しているためだろうか。

考えてみれば、私が鏡を見つめながら髪を直すときに左右反転感を抱かないことが多いのも、すでに触れたような、実際の手の動きと鏡中の手の動きとの緊密な連動性のためだけではないのだろう。それに加えて、鏡の中の私を見つめる私の視線も即物化し、鏡の中の私を物体視、客体視していることが必要なのだ。私の鏡像は、文字どおり私の作業対象なのである。逆にいえば、自己鏡像が左右逆転して見えるためには、それが何らかの形、何らかの程度に主体性、自立性、他者性、対立性の色合いを帯びていなければならないということになる。これをシュミレーションするために、平面鏡と凹面鏡の前に立つ自分を想像し、私と鏡像との関係をそれぞれ比較してみる。右手を上げる。右手で顔面に紅を塗る。鏡の中の私と握手をする。肩を叩く。剣を手にして激しく刃を交える……。

観念的鏡遊びも、少し酔狂に傾いてきたようだ。いずれにせよ、鏡像左右反転問題を論じる枠組みに、物理学的・光学的視点や心理学的・認知論的視点だけでなく社会論的・文化論的視点、つまり〈鏡像社会としての現代における自他・世界認知〉あるいは〈現代社会の鏡像文化〉の問題として考察する視点を加えてみるのも一興ではないか、というのがこの形而上学的鏡遊びの結論らしき感想である。

註

（1）本稿の議論は、逐一言及しないが、高野［1997］と吉村［2002; 2004］に多くを負っている。特に後者は、この問題の主要論点と基本的アプローチをほぼ出し尽くしていると言える。

（2）鏡文字は、①紙上・画像上に描かれた場合、②紙上・画像上の原像が鏡に映る場合、③原像の文字が描かれた媒体を手にもったり身に付けたりして鏡に映す場合などの事例が考えられる。鏡文字の見え方を判断する者が原像を直接視認・比較できない状況では、いずれの場合でも、記憶の中にある、現像と同形の文字が比較基準となり、①～③の間に根本的な違いは認められない。原像が現前に与えられていれば、それに鏡文

字を照らし合わせるわけであるから、この場合にも、①～③の区別は消える。要するに、根本的な区別は、基準の文字が現前にあるか否かなのである。

（3）この意識内在的な上下・前後・左右の構造性がいかに恒常的で不変、堅固であるかを実感できるのが逆さ眼鏡を介した世界・自己体験である（吉村、2002）。第一に、外界の上下・前後・左右関係と意識のそれとは〈平常〉ならば全体的には一致・和合しているが、ここではその調和が完全に崩れてしまう。そして外部世界のすべてが反転する中で、私の意識に内在するこの不変で恒常の空間的構造性が強烈に意識されてくる。第二に、この外的反転世界も、一定時間が経過すると、〈平常〉世界に〈戻る〉。一度、枠組みを抜け出て反転した外部世界を、意識内在的なこの構造秩序に基づいて再構築したのである。

（4）倒立視に関しては、顔面認知と他の事物の認知、後者の場合でも単純な形姿と複雑な形姿の認知とを区別して論じる必要があるようだが、ここでは立入らない。

（5）筆者（池田）が跡見学園女子大学で行った簡易アンケート調査の結果も鏡像左右反転の相対性を示唆している。「鏡の中の自分の像は左右逆転して見えるかどうか」という問いに、二〇〇九年七月の調査では、１２８人（５６％）が「見える」、１０１人（４４％）が「見えない」と答え（無回答・無効６２人）、二〇一〇年十一月の調査では、５０人（５４％）が「見える」、４２人（４６％）が「見えない」（無回答・無効８人）と回答している。ある学生が「鏡の側から見たら逆に見えるけど、こちらから見たら逆に見えない」とコメントしているが、この中に問題の所在が端的に示されていると言える。また、日本舞踊をしているという別の学生は、「鏡を見ながら自分で着付けをするが、襟がカタカナの「ソ」の形にならなければならないのを間違えたことはない。しかし、子供の頃には着付けを周囲の大人にしてもらっていたが、逆に着付けをされることがよくあった。現代人は鏡になれちゃってるから、実物を相手にしづらくなっているんでしょうね。」と記している。生活過程における鏡像と〈実像〉との錯綜・反転関係！

文献

ジョンソン、M. 1991『心の中の身体　想像力のパラダイム転換』、紀伊國屋書店。

高野陽太郎 1997『鏡の中のミステリー　左右逆転の謎に挑む』、岩波書店。

朝永振一郎 1965『鏡のなかの世界』、みすず書房。

藤井直敬 2005『予想脳』、岩波科学ライブラリー。

松沢哲郎 2002『進化の隣人　ヒトとチンパンジー』、岩波新書。

吉村浩一 2002『逆さめがねの左右学』、ナカニシヤ出版。

――― 2004『鏡の中の左利き―鏡像反転の謎―』、ナカニシヤ出版。